

春の暮より

柴

舟

病みて

天地のものゝ斜になりぬやと思へばわれのうすめまひする  
初夏の日ごと夜毎をねてあれば病てふさへうち忘れつゝ  
とこしへにわれと等しき人はあらし思へばこの身愛すべきかな

観櫻御會の日新宿御苑にて

行幸まつ苑の廣道針葉樹細かに春の影おとしたり  
うちならび額づく前をかゞやかに春の日のごと君は過ぎます  
くれなるの花の小さが満てるかな君がふましし苑の御芝生  
捧げもつ大御杯ゆたかにもたゝふ葡萄酒の色はも

濱離宮にて

松の風ふきし暮れば咲きつゞく八重の櫻ぞ競ひ袖振る  
新しき匂を立つるこゝちして楠の若芽ぞ風に光れる

豊島野

賛助員 太田 光子

豊島野は丘べもしどに家して住む人多くなり  
にけるかな  
麥の芽は踏みにじりつゝ豊島野は昨日も今日も  
家たていそぐ  
豊島野の麥生は市となりにけり鬻ぐさなかにほ  
こり風ふく  
百樹立芽ふきそろひて豊島野は家居苦しき春さ  
りにけり  
うつうつと芽ふく木立のこちごちにすみて悲し  
き人殖えにけり  
物思ふと寝ず起きたる朝けにも休まれなくにわ  
が世のわざは  
玉くしげ明くるあしたの疲るれば寝んとし思ふ  
惜しき此の夜を  
夜くだちにいやつぎおこす火はあかし忘れじと  
思ふ人のことの葉  
あかつきと鶏はなくなり疲れたるわが身はいま  
だねむられなくに

村肝の心に思ふこと云ひてすがすがしかも今宵

のこゝろ  
つぎおこす炭火の燃ゆる夜をふかみ歸るといふ  
か寂しき家に  
屋根並めて里わしづけき春の日に芽ふく梢の聲  
をこそきけ  
うちはへて家なみしけば芽花さく豊島ののべは  
都となりぬ  
すゝけむり遠くなびきてかつしかの稻田のはて  
に見えず筑波も  
豊島野は里住みよしと移りきて八十氏人は家た  
てにけり  
驚きて走りたりけり村の奥道のとまりに河の淀  
みゆれば  
潮さして瀬鳴り聞えず大河をそばに來る迄知ら  
ざりにけり  
塀にそひ獨歩める宵深し凍てそめて土は濘らざ  
りけり  
立とまりまけば寂しも人の聲向ふに消ゆる長塀  
にそひて